

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ヴァルキリー スレイブ 聖少女の集

小説 狩野 景

挿絵 ゆいまゆたか

第一章

救国の聖女

006

第二章

城塞都市の罨

034

第三章

狂王の城

103

第四章

聖少女の暎

154

第五章

狂乱の聖女

195

第六章

闇の中の光

234

登場人物紹介

Characters



リリア

神聖国家カナレの聖女官。ユージニアの侵略から祖国の危機を救うため、自ら鎧を纏い、銀十字聖騎士隊を率いて戦う。早熟で肉感的な身体つきとは裏腹に、純粋で清廉潔白な人柄。

アルミナ

湖畔の小国キトニスの姫。青みがかった銀髪ショートカットが印象的な美少女。気性が激しく、気位が高い。

ギルバート

野望に燃える、ユージニアの若き国王。自身も勇猛な戦士で、闇色の甲冑を身に纏って戦う。冷酷で残虐な人物。

カサンドラ

ギルバートの姉。瘦身の美女。慈悲や思いやりといった感情が欠落した快楽主義者。母親を死に追いやったカナレに対して怨みを抱いている。



「や、やめろおっ!! 挿れるなっ! だめえっ!」

だがミゲルの指を濡らす濃厚な蜜は、密閉された鎧の中で熟成され、いまやむせ返るような牝媚臭をさせている。その発情蜜に煽られ、貧弱な神官の中に潜む野獣が覚醒した。

無防備な聖女の身体を組み伏せる。ゆるゆるに脱力したすらりと長い脚を力任せに左右へ割ると、柔軟な股関節はどこまでも広がり、よじれショーツからはみ出た金糸の陰毛がほのかに輝く。その中心、濡れ透けた布越しに朝露をかぶったような花卉が、液濡れにふやけながらも満開した。

包皮を割って腫れ膨れたように露出する花芯から、受粉の時を待ち、ぱくぱくと開閉するように蠢く泉洞までをすべて披露している。たまらずミゲルは最後のヴェールとなったショーツを膝まで引き下ろし、露わになった淫蕩花にむしゃぶりついた。

「ああ、あああっ、だめえ。いきなりいはああっ!!」

まず、べろりと甘露を喉に流し込むように舐め上げると、リアアはしゃくりあげるような悲鳴を漏らした。やっと先ほどの衝撃が治まりかけていたというのに、また昇りつめてしまったのだ。しかしさらにその上があることを聖女は思い知ることとなった。

カサンドラを満足させただけのことはある。ミゲルは舌技も絶品だった。大陰唇そのものには触れず、その周りに円を描き舐め回す。股のくぼみをちろちろとくすぐりじらしながら、陰毛を撫でるように、手のひらで恥丘を圧す。じれったいような痺れが陰核と膈壁

に生じたとき、舌を縦に丸め、先を尖らせてヴァギナを突いた。

「んくっう！ 中あっ!!」

浮き上がっていた腰が、すんと落ちる。舌を半分ほど埋没させたところで、そのまま上に、粘膜腔ごとクリトリスへと舌をこそげ上げた。

「———!? かはっ!」

次から次へと襲い来る未知の絶快感に、頭を乱された。細いものならすんなり入る程度に開いたヴァギナに、小指の先を高速で出し入れされ、その感触の理解が追いつかぬ間に、剥け陰核を強く舌でこね上げられる。

勃起乳首が鈍く痛い。たわわに実った乳房は、リア自身の手に任されていた。一度、官能を呼び狂わす揉みかたを教えると、しなやかな指は次々に新たなバリエーションを生み出し、もし母乳が出る身体ならば、すべて搾り尽くされてしまうほどの巧みさを以て、力次第でいかようにも形を変える柔丘をこねる。

「———いいやああ……だめだああ……いけないっ……や、やめ……」

なにが嫌なのか、なにがだめなのか、なにがいけないのか、なにをやめて欲しいのか——リアアの乏しくなった理性にはもう説明がつかない。拒否をつぶやきながらも、身体は悶え、獣の姿勢を求めるミゲルに四つん這いの尻を高々と突き上げた。

用意が調った。口の端から泡を吹き、墮神官は土気色の顔をさらに色暗く染め、これま

での倍近くの大きき太さへと過興奮勃起したペニスを広げた膣門に押し当てた。

「くあっ!! 挿れるなあっ!! 挿れたらあっ! だうわあああああっ!!」

処女を貫こうとする行為に異議を唱えるかのような叫びが、泣き声のように耳をつんざく。それを黙れとばかりに、ミゲルは腰を叩きつけた。すば——んと小気味よい音を立て、処女膜の抵抗も、収縮膣の妨害も難なく突破し、呆気ないほど簡単に、根本までペニスは鞘収した。その容赦ない打ち突きは、床に踏ん張る聖女の四肢をはず、と押し滑らせ、さらには風化した石壁のようにもろく弱った彼女の意識を天高く打ち上げた。

成層圏を超え、真空に窒息する官能を内にとどめ耐えきろうと、締めつけが男根との隙間を密着させる。行き場をなくした官能水がぶしゃあと噴き出し、リリアばかりかミゲルの股腿をも濡らす。気が変になってしまいそうだった。それなのに欲求が止まらない。これ以上耐えきれないというのに、子宮の奥に潜む水蛭がさらに強い刺激を求め蠢いていた。

「あはうう……」

その要求が伝わったのか、ミゲルが動きを始めた。尻を抱え込み、バックから突くようにペニスを出し入れする。

なんとということのない後ろからの体位もリリアにとっては初めてのものだ。ガンガンと力任せに突かれ、子宮が奥底まで押し上げられる。こすれるペニスのふしくれと膣の粘膜壁は、痺れるような熱い快感を生み出す。しゃんしゃんと固い音色を響かせながら揺れる

鎖帷子が、勃ち膨らんだ小乳首を擦り上げる。

「あひゃあつ、いやつ、だめえ……そんなにしたら壊れちゃうからっ！ あつ、あつ、あはああああんっ!!」

猛烈にストロークを速めながら、身体を持ち上げるほどの強さで突きまくる。体力的にはリリアにもまったく及ばないであろうこの神官の、どこにそれだけの力があるのかという動きだ。しかもリズムは単調のようでも、突くたびに挿し込む角度を微妙に変え、先端が膣内の様々な箇所をこそげる。

巨乳挟みで奉仕したときに感じた膨張感を膣の中にも感じ、ようやく解放されると頭の隅が安堵したとき、腹部のほうに回して股間にまさぐり込んだミゲルの手が茂みを分け進み、ピンと立つ勃起豆を探り当てた。

「やああつ、クリいつ！ そこ触つちやだめえ!! だめだめだめえええつ！ そこ強くするなああつ!!」

遠慮も仮借もないただ乱暴なだけの指先が、ゴリンゴリンと潰すような勢いで陰核を左右にこね転がす。痛かった。甘さのない痛みが官能の坩堝を叩き揺さぶる。

「ひああああああああああ!! お願いいいいいいつ、みんなもお、みんなもおおとおおつ!!」

思わず叫んでいた。騎士たちを、銀十字聖騎士隊の仲間たちを呼んでいた。



「なっ!? まさかっ!!」

カサンドラの顔色が変わった。自分が術を施し、自分が認めた者しか操れぬはずの騎兵が、本来の主の絶叫に従っていた。リリアを取り囲み、ペニスをさらけ出す。そして彼女に先端を向けたまま、激しくしごき始めた。異様な淫熱が凝縮する。ミゲルの動きも、リリアの喘ぎも限界の速さを超えている。その速度にまで騎士たちが急ぎ追いついたとき、

「はくううううううっ!!」

食いしぼるように声を噛み殺す絶頂だった。ぶるぶると激しく痙攣するリリアの膣内に、命までも放出してしまうのではと思うほど大量の精濁液が噴出された。そして騎士たちも、処女開通を祝うように、白い飛沫を聖女の身体に振りかけた。

熱が治まってゆく。あれほど激しく身体を苛み、絶頂の途中にあっても貪欲にさらなる快楽を求めた発情が次第に消えてゆく。それなのに、まだミゲルは名残惜しくリリアの中に残り、どくどくと精を注ぎ続ける。途端おぞまじさが甦ってきた。

「——も、もういいだろ。いい加減にそれを抜いてく……れ……!?」

振り返ったリリアの目に信じられないものが飛び込んできた。噴水のように降り注ぐ大量の血。それはいまでも彼女を貫き、精を注ぎ続けている男の首から噴き出していた。

傍らには、半月形に湾曲した鋭い刃を持つカサンドラが、流れる血の色に喜悦を浮かべている。その刃で彼女は突如ミゲルの首を切り裂いたのだ。自力で結合を抜き放すと、リ

リアはくるりと前転し、王姉姫から距離を取って立ち上がった。

(身体が元に戻っている。発情も治まっている)

餌を得て受精を促す必要がなくなったのだろう、蠢く水蛭は活動を休めていた。また腹をへらせば、再びリアを狂おしい欲求へと陥らせるのだろうが、いまは問題なく自由に動くことができる。

「マルティン……グート、動けるか？」

先ほど呼びかけに応じ寄り集まってくれた仲間たちに声をかけた。しかし彼らは再び彫像のように動きを止め、躰主の命令を待っている。リアはさりげなく、彼らからも距離を取り、そして血の海に沈むミゲルの骸をうっとりとした眼差しで見つめているカサンドラに問いかけた。

「その男はお前たちの仲間となったのではなかったのか？ なぜ殺した？」

こうして無惨な死を迎えてもなにひとつ同情も浮かばぬ。それでも一応は同国人であり、昔からの知り合いだ。その男に不可解な死をもたらした理由が聞きたかった。

「ふん、しょせん裏切り者は裏切り者よ。身内に置いてもろくなことはない。ただお前と交わらせ屈辱を与えるために生かしておいたのじゃ」

ぺろりと刃についた血を舐め取り、愉快と言わんばかりの笑みを浮かべる。

「しかし思った以上に床^{とこじょうず}上手じゃったのう。わらわの愛人として残してもよかったのじゃ

が、どうやらおぬしに懸想してしまったようじゃ。わらわと交わっておいて他の女になびくなど許されることではない」

けらけらと乾いた笑い声が心を凍りつかせた。この姉弟と話を交わすごとに、虚ろな風が胸を吹き抜けるような感覚に襲われる。

「しかし、水蛭がもたらす催淫フェロモンの威力を計るよい実験台となってくれた。もう少しで我が弟があのような醜態をさらけ出すところであつたからのう。自らを発情に苛むだけではなく、交尾の相手もその肉欲へと陥れる。お前に王の相手をさせるわけにはいかぬ。それにな……わらわの胸の傷の恨み、やはりおぬしの命を以てあがなわねば、気が暗れぬのじゃよ！」

血の臭いに酔つたようなるれつで言い放つと、カサンドラは襲いかかつてきた。

「止まれや！」

呪縛の命令で足止めしようとする。しかし、

「動くっ！ 動ける!!」

リリアにかけられた呪術が効力を失っていた。驍術と違って、催眠呪術の効き目はそれほど強力ではない。水蛭による尋常ではない発情が、その極限までの高まりによって精神のたがを外し身体を縛る暗示からリリアを解き放っていたのだ。そして水蛭もいまは餌を得たことでしばしの沈静状態にある。

(いまならカサンドラを人質に取り、どうにか逃げることもできるかもしれない)

しかし、騎士たちがすでに守護の体勢を整え、リアを迎え撃とうと待ち受けていた。

「くっ!!」

術をかけられ仕方がないとわかっていても、心が痛む。彼らとは戦いたくない。レンの再現は二度と嫌だ。カサンドラを諦め、くるりと身を翻すと、リアは扉のほうへ走った。さりげなく立ち位置を変えることに、出口との最短距離を確保していたのだ。

「しまったっ!! 追えっ、おまえたちっ!!」

騎士たちに追撃を命じるカサンドラ。しかし驂兵は操られる分だけ、幾分反応が鈍い。彼らが追撃を始めたときには、リアはすでに扉に手がかかるところだった。

全方向に外へ通じる窓があり、並はずれて天井が高い。この部屋の特徴から、ここは城の内部ではなく、離れに立てられた独立する建物ではと予想していた。それならば十分逃げるチャンスはある。騎士たちが心配だが、むしろ彼らは自分をおびき寄せるための囮に使える。すぐにどうこうされる危険は少ないと判断した。まずは逃げることだ。裸だが、恥ずかしがっている暇はない。

(もう、いちいち詰まらぬことで恥を感じる処女ではないのだから……)

ちくりと痛む胸を怒りに染めて、蹴破ろうとしたとき、その足を空振らせ扉が開いた。たたらを踏みつんのめる身体を軽々と抱き留められる。鉄板の上にゴムをかぶせたように、

固く弾力のある身体。腰を掴む分厚い手は、痛みに顔が歪むほどの握力。背後から追ってくる王女と同じ血の通わぬ眼差し。

「復讐は終わったようだな、姉上」

「ギルバート!! い、いやまだじゃ。まだこの傷の恨みは……」

なんとか弟を聖女から引き離そうとするが、彼はそれ以上聞いていなかった。リアの内股にこびりついた精液と、発情が強すぎ痛みを感じることもなかった破瓜の出血を確認し、ひよいと彼女を抱え上げた。

「ふん、ということは、いまは水蛭が満腹し発情も治まっているのだな？ ならばフェロモンに狂う心配もないわけだ」

「ギ、ギルバート、なぜそれを!!」

研究しているのは自分だけであり、その習性は誰も知らぬはずの水蛭を、弟が熟知していることに驚き慌てる。

「俺はこの国の王だ。姉上の調べていることを知るなど造作もない。約束どおりこの娘、もらってゆくぞ」

そう言うが早いか、狂王はゆったりとしたくつろぎ用衣服の前をはだけると、ミゲルのものなど問題にならない太男根を露出した。

「ひっ！ な、なにを!! あがああああああ!!」

熱い吐息に包まれる。ぬめる股間に、同じようにぬめる唇が吸いつく。

「ふう——んふああ、あ、あ——っ!!」

子宮ごと外に吸い出そうという吸引に、腰が抜けそうになる直後、蠢く舌でじゅろんと舐め回される。

「い、——はっ、あああああっ!!」

陰核から肛門まで粘膜をすくい上げられる。邪魔する布がなく、直接舌が這ったのだ。たら、どれほどの気持ちよさを得られただろう。舌をヴァギナに突き立てられても、ショーツが邪魔して、少ししか潜り込まないのだ。少しだけ、布をずらしてくれば、そこはすぐに生陰部だというのに。獣の思考力しかないいまのアルミナは、そんな考えすらも浮かばない。イクにイケぬ生殺しのような物足りなさに、鋼の上からたわわな胸を自ら掴む。(せ、せめて、ここだけでも自分で弄ればいいのに……硬いのっ! 感じないのっ!! ふっ、くううううう!!)

強く揉んでも硬い膨らみはたわみもせぬ。微細な振動がその下の鎖を揺らし、見当違いの箇所をくすぐる。愛液をちゅうちゅう吸うアルミナの舌使いも次第に単調になり、じれったさだけが膨れあがった。この犬少女が恨めしい。そしてこれほど欲しているのに、ペニスをしまい込みただ見ているだけの兵士たち。なぜ襲いかかり自分を犯してくれないのかと、理不尽な怒りすら生じた。それでも唯一快感をもたらしてくれるアルミナの口から

股間を離せず、すすり泣き混じりの嬌声を上げる。

「これこれ、お前ばかりが腹を満たしてどうする。お姉さまを満足させてあげなくてはいいかぬじやる。ほれ、腹を空かせて可哀相に、泣いておるわ」

ソファにしどけなく寄りかかり、たきしめた香の中、様子を見ていたカサンドラがたしなめた。キッと睨むリリアの視線を無視して、彼女は従者に命じ、過剰に宝石で飾り立てた細長いケースを開けさせた。

うやうやしく取り出されたそのものを見て、リリアは思わず、「あつ!!」と声を漏らした。凶悪なイボが表面にごつごつと浮かび上がるそれは、男性器を模した極太の張り型。しかも両端に、気色悪いほどリアルな亀頭がぶつくりと膨らみ、磨き上げられた輝きを放っている双頭の構造だ。

その性具を男は床に放りだした。その途端、リリアの股ぐらに鼻面を突っ込んでいたアルミナが、猛然と四つん這いのまま走り出した。飛びかかるように張り型にかぶりつき、舐めしゃぶる。まるで褒美に骨を与えられた犬のように。

口を含めぬほど大きな亀頭の先にペロペロと舌を這わせる。たっぷりの唾液を幹に塗りたくり、差し込む陽光にてからせていた。十分に濡れ湿るまで全体を丹念に舐め上げると、彼女はおもむろに立ちあがる。それまでずっと犬の姿勢をとり続けていたため、人形のように両脚を揃えてちんまりと立つ姿が可愛らしい。

しかしその清純な光景を叩き壊すように、アルミナは純白のエプロンがかかった膝丈の黒スカートをたくしあげ、その下から大人びたレースで飾られる、黒い極小のパンティを覗かせた。両手で端からくるくると丸めて膝まで降ろし、髪と同じ薄い薄い青銀の陰毛を露わにすると、二本の足を大胆に交互に上げ、脱ぎ捨てる。そしてその場にぺたんと足を投げ出し座り込むと、再び張り型を抱え込んだ。

リリアの正面を向き、黒いニーソックスで覆った脚を膝立てたまま、ゆっくりと開いてゆく。これ以上無理なまでに広がり、裾広がりのM字形をなす脚。その付け根を隠すスカート地をつまみ上げる。清楚なメイド服と、あどけない少女の容姿がその仕事の淫猥さを強調した。

半眼に開いた瞳を潤ませ、口元に淫らな笑みを浮かべる。幕が開くように露わになった陰門は、汁をあふれさせるほどに潤っていた。直接身体に刺激を受けてはいない。しかしリリアを弄ぶことで、封じ込められているアルミナ自身の意識が高ぶりを感じていた。

操られた結果とはいえ、姉として慕い愛する者の身体を、陵辱し快楽をもたらす。その禁断と背徳の行為が、倒錯的な興奮をもたらし、股濡れを生じさせたのだ。

その成果を披露するようにリリアの目の前で、ほのかに赤みがかかる膜襞をひくつかせる。そして自分の唾液でべちよべちよに潤った模造ペニスを、その中心にあてがう。先端が門をこじ開け、反射的にガクッと背筋が跳ねる。張り型は巨大だった。開ききり受け入れの

用意は万全だというのに、なかなか潜り込もうとはしない。焦ると穴壁を大きくこすり、快感が膣の収縮を起こし、押し出してしまふ。

「くふううふう……んふう——んっ！」

喘ぎの混じった呼吸を整える。両手で根本を握り、一定の速度を保ちながら押し込む。ずぶずぶ、とゆっくりだが確実に胎内へ埋没してゆく太張り型にリリアはじつとりとした視線を注いでいた。アルミナが離れ、見捨てられたヴァギナに、シヨーツの隙間から指を一本挿れ、ぬぶぬぶとかき回していた。

ざらざらした柔らかい膣内を刮げる指の快楽に浸りきっている。奥にぶくと突出した子宮口をつつくと、わずかに這い出た水蛭の触手が爪の先に絡み、ペニスではないとわかる。とまた引っ込んでゆく。

自分の指を入れてみるなどということはこれが初めてだった。入れられる感触はもちろんのこと、柔らかな壁の織りなす不思議な空洞を泳ぐ指に感じる触感も、不思議なものだった。後ろ手に尻から股間を覆うように手のひらを這わせ、折り曲げた中指を根本まで忍ばせる。そのまま手の上に尻を降ろし、脚を崩して座れば、指の関節を動かすだけで膣内をかき回せるし、正面から見る同胞たちには、手を後ろにつき座っているようにしか見えないだろう。

(で、でもなんだか、みんなわたしを見てる)

隠しているつもりなのだが、ぶちゅつ、じゅぶんと、粘液と粘膜の摩擦で鳴る音が丸聞こえである。急激に熱を持った彼らの視線に、疑問と恥ずかしさを感じながらも、もう指は止められない。しかし、

「ん、んんっ——くはあ!!」

ついにアルミナが、陰部の奥底まで張り型を取めた。裂け目を大きく広げ、深々と突き立っている太いもの。それに比べると細く、何の抵抗もなくすると深穴に潜る自分の細指がとてもつまらなくちっぽけに思える。やはり押し広げ突き上げる疼痛を伴った快楽が欲しい。

(アルミナ……わたしを差し置いて……でも、あれなら……)

双頭のもう片方がアルミナの股間から隆々と屹立している。まるでアルミナの女陰から、男根が生え出したようだ。少女の童顔に似合わぬ、太く長く、凶悪な突起を表面につけた巨根。あれで突かれない。突き上げられれば存分に達せるはず。

じゅぶん、と抜き出す指の残した刺激にぶるんとひと震えすると、聖女は四つ足で這い進んだ。カサンドラによって巻かれた首輪から垂れ下がる鎖が、じゃらじゃらと床を引きずる。アルミナの首にも同じものがはめられていた。獣扱いに屈辱をたぎらせながら、煽られ増幅された本能のままに欲望を貪る。

股間に顔を埋めるように、リリアはリアルに造形された龟头を口に含んだ。びくっ、と

アルミナの身体が跳ね上がる。わずかな刺激も肉柱を伝って膣や子宮を揺るがすのだ。

ごくりと唾液を飲み込む。これを自分も膣内に収めたかった。こんな太い竿で奥底まで突かれたらどのような気持ちだろう。そう思った次の瞬間には、四つん這いとなり、高々と尻を持ち上げていた。同胞たちの、聖女に対する落胆と侮蔑のざわめきが湧き起る。非難の視線に情けなさを感じながらも腰をくねらせ、リリアは細い喉から甘ったるい嬌声を漏らした。

アルミナがよたよたと二本足で立ちあがった。可憐な女体から男根を生やすさまは、まるで神話の中の両性具有の神。ただし神はこれほどグロテスクで巨大なペニスを持つてはいない。膝上までをエプロンとスカートに覆われているというのに、そこから亀頭を突出させている。それを落とさないように膣に力を入れくわえ込んでいるため、歩きがよたよたと緩慢になる。動くごとの刺激が官能を呼び起こすのだろう、「ふうー、はあー」と深く粘つく呼吸を大きく開けた口から行う。

がくん、と時折腰が抜けたように膝を折り、倒れそうになりながらも、リリアの背後に回る。そしてびしょ濡れに湿り透けながら、いまだ股間を覆っている極小ショーツをつまんだ。

「——あんっ！ ア、アルミナ……はうんっ!!」

強く握るとぬめぬめした液体が滲む濡れ布を引き下ろす。新たに流れ出た女汁のむわん、

とした匂いを立ち上らせ、弾力と柔軟を兼ね備えた美形のヒップが現れ出る。その桃のように窪んだ谷間、薄茶色の肛門の襞をもじもじと動かすその下に、大きく開いた膣の中から、だらだらと絶え間なく、催淫の果汁を滴らせる女性器が、満たされぬ発情に蠢いていた。

ただれたようなじゆくじゆく陰部を、指で撫でほじる。人差し指と中指。二本揃えたそれをヴァギナに押し入れると、ビンとリリアの背を跳ね上げつつ根本まで埋まった。ぐちゅぐちゅと円を描くようにかき回すと、尻全体が追従する。

「——い、いや。だめ、もう指は……アルミナ……」

拒否しながらも満更まんさらではない声が言った。指を差し込んだまま、中で開いたり、折り曲げたりすれば、途端に大きな嬌声を上げ、沈んでいきそうになる。この情けない声も全部捕虜となった同胞たちは聞いているのだ。どう思っているのだろう、敵の手に落ち淫らな快楽に墮落した救国の聖女を。おそらく——軽蔑しているに違いない。失望していることだろう。それでもいまは子宮の中でたぎる、絶え間ない発情を満たすことにはしか頭が働かない。

びゅぶん、と淫猥な音を発し、アルミナは指を引き抜いた。『犬』としての行動か、指を濡らす濃厚な蜜をしゃぶり上げる。喉を十分に潤すと、股間の張り型を握りしめた。膣口から真っ直ぐと下を向いたそれを手前に持ち上げ、本物の男根のように勃たせようとい

うのだ。力を込めると胎内に埋まった部分が内蔵を押し動かし脚がぐくと激しく震える。全身に汗を噴出させながら無理矢理に引き上げると、疑似ペニスはぐぐぐとねじ曲がり、地面と水平以上に上を向いた。

「んくっ！ ふあうう」

極限まで拡張した膣をさらにこじめる刺激にへたり込みそうになりながら、吐息を漏らす。まだずくずくと疼く膣壁に身がわななく。しかしこれで準備が整った。折れ曲がり前を向いた張り型を握ると、その先端を後ろからリリアの膣口にあてがい突き入れる。

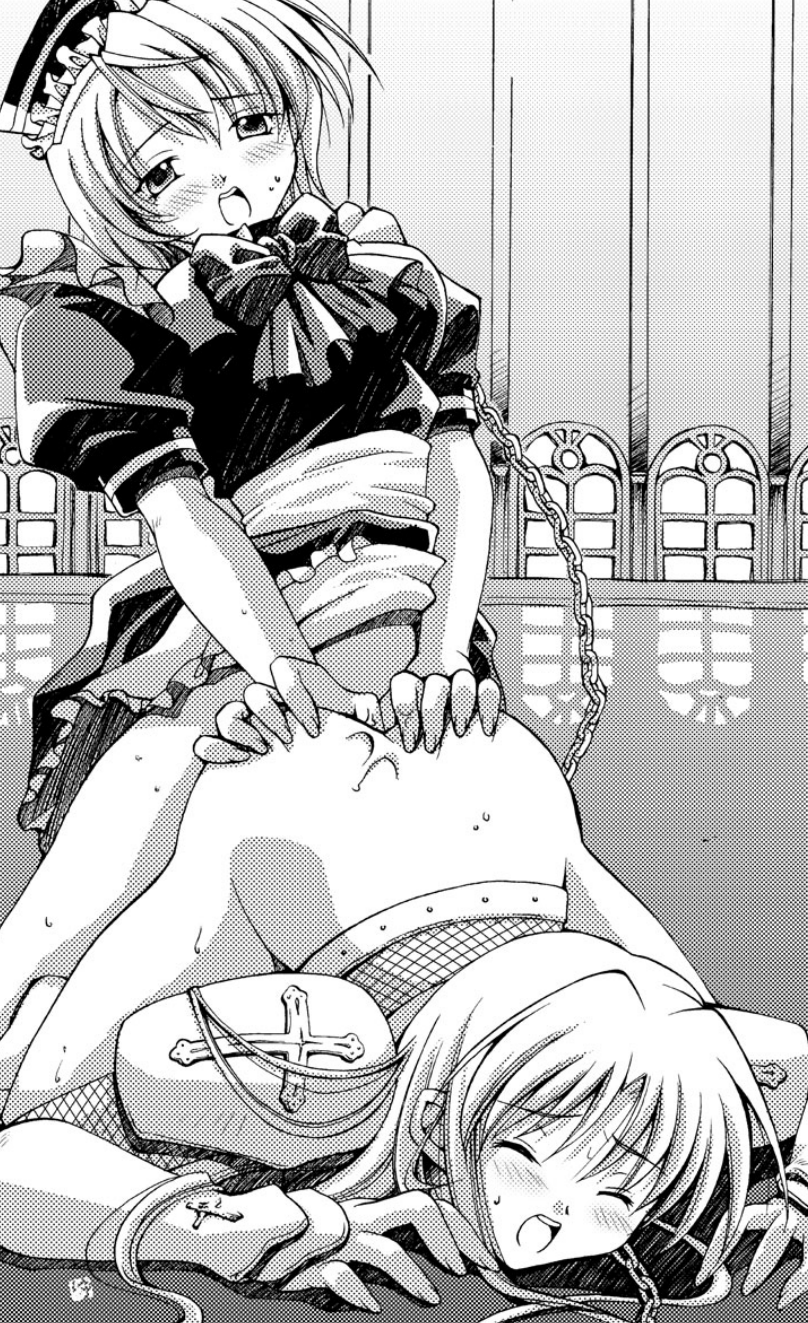
「——んはっ、嫌あっ、そんなああっ!!」

入れられ始めると、見た目以上に大きく感じられた。発情に緩みきり、拳でもすつぽりと入りそうにいくらでも広がるヴァギナが、窮屈な処女穴になってしまったようだ。

「んくくう、きついい……ア、アルミナあ!! だめ、太すぎっ！ 穴、裂けちゃうっ!!」

騎術の虜となった王女は聖女が叫ぼうがお構いなしに、自らの膣から突き出た男根を、聖女の膣へと打ち込む。どすと重い疼痛が生じ、子宮が押し上げられる。今度はリリアが犬となったように顔を床にこすりつけ、上半身を突つ伏した形で悶え狂う。膣の壁を擦るといふより、膣全体を押し広げながら鐘突きのようにゴンゴンと強く子宮に打ちつける。

同胞たちの視線が痛かった。恐ろしくて顔を上げることができないが、ひしひしと感じる。つい先日まで、祖国を救うために勇敢な戦いを繰り返していた女が、捕まるやあつと



いう間に、敵の陵辱で喜悦を表す淫乱ぶり。恥屈に打ち震えながら、悦楽に堕ちてしまう身体をどうにもできず、嬌声を張り上げるばかりだ。

「あ、はああ……ち、膺気持ちはいい……お尻気持ちはいい……。—— イッチャウの……もう、イッチャウの……でも……」

肉襷を刮がれ、陰唇のびらびらを、ぶちゅぶちゅと押し潰される。熱の玉となって意識を押し上げる快楽に一度目の絶頂を迎えようとしている。しかし足りないのだ。あと一段がどうしても超えられない。それは、胸だった。胸だけがいまだに頑丈な鎧の中。腰当てを外したのだから、胸当ても外せるだろうとアルミナに懇願しているのだが、完璧にカサンドラの支配下にあり、返事すら返ってこない。

胸を揉まれたかった。アルミナの小さな手で、たぶたぶの柔らかな膨らみをなぶり揺らしてもらいたい。こうやって、後ろからずくずくと突き上げられながら乳首を手加減なく弾き転がされたら、一度に何回でも達してしまえそうだ。

しかし、刺激を待つて熟れ膨らんだ乳房も、固く屹立した乳首も鉄鎧の中。興奮に汗濡れた鎖帷子がべつとりと貼りつき、微かに表面を撫でるだけ。性の悦びを覚える前は大きすぎて邪魔でしかなかった乳房が、いまは早くこの手に取り戻したくて仕方がない。

「んあっ、アルミナあ……胸……して……胸してよお！」

いままでは与えられる官能に嬌声を上げているだけだった。しかしついに自分から「し

て」と求めてしまったのだ。自分の口からはつきりと、胸をどうにかしてくれと。リリア自身はその事実気付いていない。だが一度口に出して求めてしまえば、一切の歯止めは利かなくなっていた。

「ああっ……やあ、もお、もつと奥までえ!! なんで? いいのに! いいのに!! 来ないの、来ないのよお!? これじゃ、余計につらくなっちゃうっ!!」

狂ったように訴え求める。同胞たちの目もへったくれもなかった。快楽は絶え間なく得られるのだが、それが絶頂に結びつかない。解放感に至らない焦燥が、じりじりと身体をなぶり、さらに強い刺激への欲求となって膨らみ続ける。

リリアの発情を止めるには精液を子宮に注ぎ込み、餌である受精卵を水蛭に摂取させることこそが必要であって、快感を得るかどうかは関係ないのだ。いくら、めくるめくような快楽に包まれても射精を受けない限り、水蛭は男を誘うための発情を煽り続け、強烈な催淫作用をもたらす。官能に身悶え、さらに強い刺激を求めてむせび狂う。悦楽地獄へと聖女は陥っていた。

「んああああっ!! 足りないっ! 足りないのお! あそこが、苦しいよう、あそこに入れて欲しいのっ—— お、おまんこに、ペ、ペニスを……太いちんこをお! ぶちこんでええっ!!」

聖女ということ以前の、下劣極まりない叫びをわめき散らす。目は血走り、美しいはず

の金髪はざんばらと乱れ逆立つ。後ろから自分を犯していたキトニスの王女を、物足りない**い**とばかりに逆に組み伏せると、その股間からそそり立つ極太男根に跨り、もの凄い勢いで膣を搔き乱し始めた。

「ほう、これは面白いことになってきたの。ならばこうじゃ」

高ぶり狂った聖女の狂態に、カサンドラが喜悅の笑みを浮かべた。騎術を施した者を操るときに使うベルをちりりと鳴らし、身を乗り出してこれからの展開に見入る。その憎むべき敵の動向もすでに眼中にないらしく、リリアは考えたまますべてを絶叫に垂れ流した。「こんなに突き上げてるのにい、足りないのおっ!! なんてイケないのお? なんて飛べないのよお!」

「お、お姉さま!? あくう……ど、どうしたのですか? や、やめて! そんなに強くしたらあたし……い、痛いっ!! 乱暴にしないでっ、こ、壊れちゃうっ!!」

カサンドラがアルミナの五感を解放し、自由を与えていた。しかしもう理性が消し飛んだリリアにとつて彼女は、太い男根を膣から生やした、自分の淫欲を満たすための道具にしか見えていない。

「ああああああっ、胸っ、胸っ、胸っ、胸えええええ!! 胸が触れないからあ! 鎧なんか、鎖帷子なんか、いやよおっ!!」

ガシヤンガシヤンと胸当てを揺さぶり、帷子の露わになった部分を搔きむしる。それで



も頑丈な装備は引つ掻き傷ひとつつかない。その腹いせとばかりに、リリアはアルミナのメイド服を乱暴に破り脱がした。水色のブラジャーを引きちぎると、ぼろりとこぼれ出た柔らかな丸い膨らみを力任せに掴む。ぐによりと潰れ変形する乳房の痛みに、アルミナは悲鳴を上げた。

「きゃあああつ！ 痛つ！ 痛あ、痛い、お姉さま。鎧なら、あ、あたしが開け方知つてますから、お、お願いっ、放し……はううううう！ お願い、少しかがんで、指が届かないっ!!」

両乳房を自分の両手で滅茶苦茶に掻きむしる。その間もデイルドーの上で膣をぐちゃぐちゃと掻き乱す上下ピストンを激しく続けるため、アルミナの指先が、鎧を外すスイッチである紋章に届かない。ふと思いつき、王女は、リリアの股が、巨デイルドーを呑み込みながら下降してくるタイミングを見計らって、自分の腰を下から思いきり突き上げた。

「ふはうっ!!」

「かはあつ!!」

ずりゆんと、不意打ちに膣を高速で擦り上げられ、リリアはすくと腰を落とし、動きを止めた。突き上げたアルミナも子宮をぐりんと刮がれて、一瞬息が止まったが、必死で手を伸ばし開錠する。間一髪でリリアが官能から覚めた。ギロリと血走った目でアルミナを睨み、口の端から涎を垂らしながら歪んだ笑みを浮かべる。鎧は——外れない！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>